

1970年頃、メンコ、ビー玉、一升瓶の蓋、中にはカバヤのジュシーのプラスチックの筒をコレクションしては、宝物にしていた子どもがいた。お駄賃しかなかった時代を経て、1日10円のお小遣いがもらえるようになったが、親から高いおもちゃを「買ってもらう」ことに対し、後ろめたい気分がして、欲しいと言えなかった時代である。

おまけは、もともと、富山の菓売りが行商するときに進物として置いて行った版画絵（後に子ども用に紙風船など）が原型だといわれているが、この「お得感」は、今でも市井の人にとっては、何かを購入する際、とても大事な価値観となっているはずである。これと同様、こどもにとって、天の恵みのように思えたのが、このお小遣いで買えたおまけ付きのお菓子や、堂々と買ってもらえる学研・科学の付録であった。

当時は、現在のおもちゃ店で販売されているようなおもちゃは、あくまで輸出用か、それを購入できる家庭の子ども達のためにあった。一般庶民の子どもは、おまけやカードを集めて懸賞で当たったおもちゃで遊んだ。おまけ文化は大正から昭和初期にかけ、確実に「大衆文化」として根付いた<sup>1)</sup>。カバヤキャラメルの文庫、紅梅キャラメルの野球カード、グリコのキャラメルのおもちゃの小箱に始まり、森永チョコボールのおもちゃの缶詰、仮面ライダースナックのライダーカード、ビックリマンチョコのビックリマンカードへと続く。

お菓子も、キャラメルからチョコレート、スナック菓子へと人気が変遷しているのも面白い。キャラメルは戦前の子ども



写真1 グリコのおもちゃ（江崎記念館所蔵）

ものお菓子の王様だったことから、おまけ合戦のお菓子となる。カバヤと紅梅キャラメルは、世界名作全集と野球選手のカードだった。豆玩具については、何と言ってもグリコの「おもちゃ」であろう。

グリコ本社では、おまけとは言わず「おもちゃ」と呼んでいる。創業者江崎利一は、惜しみなく本物志向のおもちゃを詰めた。おまけは子ども達のあこがれの対象だった時代に、である。今でも、本物の木工職人に木でおもちゃを作ってもらい、その型を手作りで作っている（写真1）。グリコの逸話は、とてもこの誌面では収まりきれないが、その一つを紹介すると、1931（昭和6）年、日本初の映画つきグリコ自動販売機というものを導入している。この販売機は、10銭入れると2銭のおつりが戻って来るというキャッシュバックの先駆けシステムで、しかも、販売機に仕掛けてある映画が一定の時間、流れるのである。子ども達は、自分の番が終わっても、後続する購買者とともに映画の続きを見るという、ダブルの得した感を得る。

さて、こどもが熱中するおまけにはパターンがある。一つは、コレクション性である。次に「当たる」という博打性。

この時々「当たる」ことで、「年末ジャンボ宝くじ」ではないが、このどきどき感がたまたまなくなる。また、何が入っているのか、開けるまで分からないというのも、福袋同様、夢中になる要素である。そして「交換」。同じおまけが当たったら、友達が持っている他のおまけとトレードする。これらは、子どもながら自由裁量権の行使と、何がしか自分の達成感を満足させるものであった。

おまけの形態としては、シール、豆玩具、カードなどがある。仮面ライダーのカードやビックリマンチョコのカードに何故にあつくなつたのか。たかが、カードなのにとするなけれ。カード番号が振られコレクションとしての体系的があり、集めることで謎が解かれる要素も加わり、壮大な物語を追って行く楽しみが、子ども達を虜にしたのだといえる。

かたや、付録については、明治20年代に雑誌の付録として双六が登場したのが起こりである。昭和に入ると、ポップアップ絵本や組み立て紙おもちゃが多用され、中でも、「少年倶楽部」の付録は、エンパイアビル等、組み立ておもちゃの極致を示している<sup>2)</sup>。「少女の友」では、西洋的なあか抜けしたカードや詩集などを創作し、少女雑誌の付録に変革をもたらした。この流れは、少女漫画「なかよし」や「りぼん」に継続される。付録が本体を上回るさまが日増しに激化し、親たちは眉間にしわを寄せるようになった。そんなとき、小学校で買った雑誌に「〇年の学習」と「〇年の科学」

があった。少年少女雑誌の付録が紙ベースであったのに対し、こっちは最新の素材を使った新しい世界を見せてくれる付録だった。リトマス試験紙が目当たりに変化する「酸性・アルカリ性実験セット」や「解剖器」、「顕微鏡」などは、画期的だった。大人になった学習・科学の読者をターゲットにした「大人の科学」がヒットし、2012年に「〇年の科学」は「科学脳」という雑誌名で復活。いみじくも、第一弾の教材は「水よう液実験キット」である！（写真2）

いつしか私たちは、子どもの頃の宝物で遊ぶ世界から卒業し、多くの場合、その時点で捨ててしまう。しかし、その宝物で遊んだ時間も意味も決して忘れ去れることはない。ならば、どこかにそっと‘ボクの宝物’を仕舞うことにして、大人になって取り出してみることもあっていいんじゃないのかな、と思う。



写真2 水溶液キット 昔と今  
(写真提供：学研教育出版)

#### 参考文献

- 1) 足立巻一：オマケと付録の研究—庶民生活と商法—、大衆文化の創造、講座・コミュニケーション4、研究社、pp.230-246 (1973)
- 2) おまけとふろく大図鑑—子どもの昭和史（別冊太陽）、平凡社（1999）
- 3) 北原照久：「おまけ」の博物館、PHP新書（2003）
- 4) 高山 英男（監修）：20世紀おもちゃ博物館、日本玩具文化財団（編集）、同文書院（2000）